

教 仏 名 聞

第36号
(発行日)

2013年9月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

生活不安とお念仏

N 「日頃、これで生活をやっていけるのかという生活不安がしばしばおこりますが」

D 「経済的に将来やっていけるかどうかと言う思い煩いは多くの人の苦しみですね」

N 「現在、生活がでさなくて困るという人は勿論、今は生活できても将来困窮するのではないかという不安を抱えている人は多いと思います。

こういう生活不安に対しては、安定した職業に就くとか、副業を持つとか、消費を抑えるとか、いろいろな手だてで対処しています。ところで仏教ではこうした不安という苦しみに対してはどう説かれているのでしょうか」

D 「仏教は、生活不安は収入の多寡の問題だけでなく、私たちの心の問題、もっと正確にいきますと人生の依って立つところを何処においているのかをことに問題にします」
N 「生活不安は、生計に関わるだけではなく私たちの心の拠り処の問題だといわれるの

ですね」

D 「ええそうです。もちろん、いろいろ工夫努力して生計を安定させることは生活不安を減らすこととなります。ただ生活不安の起こってくる源にも注意を向け、そこに根本的な問題があることを学ぶことは大事なことです」

N 「生活不安の源はどこにあるのでしょうか」
D 「『華嚴経』という經典に『五怖畏』ということが説かれています。五怖畏とは、不活畏・悪名畏・死畏・悪道畏・大衆威徳畏の五つです。この中の不活畏というのは、活きることができなくなるのではないかという怖れのことです。まさに生活不安のことです。仏教はこうした五怖畏は真理に迷うところから起こるというのです」

N 「真理に迷うということと生活不安とはどういう関係があるのでしょうか」
D 「真理に迷うと、一番身近には『有身見』という間違っ

た考えになつてしまします。それは、『自らの身体を我とし我が物と思つて執着している』考えのことです。

有身見というのは『我が身が我である、我が身の外に我なし』という考えです」

N 「有身見が生活不安の源だといわれるのですね」

D 「ええそうです。自我と肉体でしか『私』を知らなければ、生活不安だけではなく、死の不安(死畏)もともないます」

N 「生活不安と死の不安は密接につながっていますね」

D 「ええ。心(自我)と身体である『私』しか知らないと、外の経済状態とか健康状態とか、人間関係などの外的なさまざまな条件の変化によって、動揺し不安定となります」

N 「景気が悪くなって収入が減ったり、病気になることで出来なくなるなどの縁によって、生計状態が悪くなると、心が動揺し生活不安が起こるのですね」

D 「いわゆる『私』はこういう外からの条件に随分左右されますから、私たちの心も当然不安になります」

N 「ではどこに生活不安から解消されてゆく根本的な道があるのでしょうか」

D 「仏教では『身心としての私』を超えて、私そのものに働いている阿弥陀仏のいのちの働きにであわせていただくことによつてです」

N 「今ここに私にすでに働いている阿弥陀仏にであうことが、こうした不安から解放されていく道なのですね」

D 「ええ、阿弥陀仏は『我ならざる我』として今ここに私の根柢に働いておられます。その働きこそ確かな、変わらない、生死を超えたいのちの働きです」

N 「そういう阿弥陀仏の働きを私の根柢に感じるならば生活不安から解放されていくのですね」

D 「阿弥陀仏の働きは量ることのできないのちであり、慈悲であり、智慧のはたらきです。その阿弥陀仏に根柢的に摂め取られている私であり、そこを離れて私存することも、生きることも死ぬこともできないのです。その大いなる阿弥陀仏に抱かれており、支えられており、生かされておられ、導かれておられること、そのことを知らされるのです」

N 「阿弥陀様に生かされているとか、計らわれているということはそこでいえるのですね」

D 「ええそうです。へ仏さまに生かされている」という言葉をしれば聞きますが、こういう言葉が出て来る元は、非常に根本的な真実からであって、単に周りのさまざまなものによって（生かされている）というだけのものではありません」

N 「普通は、食べ物とか、太陽とか、水とか、周りの人々の援助というようなきさまさまな縁によって（生かされている）とよく言われますね」

D 「ええそういうことも間違いではありません。それも大事なことですが、（生かされている）ということはさらに深い真実に基づいて出てくる言葉でありましょう」

N 「（生かされている）ということとは、そういう意味から言うと二重に味わうことが出来るのですね」

D 「ええそういいいと思いません。外的な条件として、食べ物や太陽や空気など、また親や友人や多くの人たちの労働などのおかげによって生かされているという面、そし

てさらに一番身近で直接的な働きとして今ここに私をあらしめているのちの働きとしての阿弥陀仏のはたらきに生かされているという面です」

N 「外的な様々なものに生かされているというのによく分かりますが、阿弥陀仏によって今ここに根源的に生かされているというのとは分かりますね」

D 「そうですね。普通はそういうのはたらきに気がつきません」

N 「そういう阿弥陀仏はどこで知らされるのですか」

D 「今ここに私において働いて下さる、目には見えず対象化できないけれども、南無阿弥陀仏の御名に御自身を現して下さるその御名を聞かせていただくことによってです」

N 「お念仏を聞くことによって阿弥陀仏の働きを知ることが出来るのですね」

D 「ええそうです。そのお働きにふれると、それが私の根底の事実と知らされますから、生活不安がやわらいでくるのです」

N 「そうすると、阿弥陀仏との関係が深くなるほど生活不安は減っていくといえるのでしょうか」

D 「ええそうです」

N 「お念仏を聞かせていただけると、生活不安は減るといわれるのですが、全くなくなるというのではないのですね」

D 「ええ、私たちが浄土に至って仏になれば一切の不安はなくなると思われます」

N 「仏になるまでは生活不安は残るのですね」

D 「ええ。いかに阿弥陀仏にふれても私たちの迷いの余習は強く残っていますから、どうしても我と我が身を私として執着してやみませんから、不安は続きます。しかしそんな中でも阿弥陀仏のいのちの中に私は置かれているという感知が少しでもあると不安は緩和してきます」

N 「お念仏を聞くととは」

D 「阿弥陀仏の広大な大悲のいのちの働きを直接に私に告げ知らせて下さるお念仏、そのお念仏を称えつつ聞くことにおいて阿弥陀仏の大慈大悲の働きを知るのです」

N 「念仏を聞くととは阿弥陀仏の大慈悲心を知ることでもあるのですね」

D 「ええ、そして大事なことは、凡夫であるかぎり生活不安という煩惱は生涯なくならないと思えますが、その煩惱

を縁としてお念仏するところに、生活不安は阿弥陀仏のいのちのはたらきとその大悲心を知らせて下さる尊い縁になるのです」

N 「生活不安が阿弥陀仏の関係を更に深めて下さる大事な縁になるのですね」

D 「ええ、聖人は南無阿弥陀仏は（悪を転じて徳と成す正智）と仰せ下さっていますように、南無阿弥陀仏は生活不安の煩惱を縁として阿弥陀仏との関係を深めて下さる功德になって下さるのです」

(了)

木村無相さんの法信

(十二)

一九八二年八月三十日（月）

半盲 無相

さて、お手紙のこと。

「たびたびのお便り有難うございます。念仏往生の本願の思召しの深さに次第に

ひきこまれていきます。」とのこと、ありがたいことです。お念仏にこもる本願力、お念仏にこもる果遂の誓のお

かげと思われます。

定散自力の称名は

果遂の誓に帰してこそ

教えざれども自然に

真如の門に転入する

とのご和讃について、金子先生、『三経和讃講話』に次のようにおさとし下さっています。

『定散自力の称名——そのような称名であっても、「果遂」の誓に帰してこそ、その第二十願の思召しによって、「おしえざれども自然に」それは自力であるとか、そういうことを教えられないでも、とにかくお念仏申しておれば、オノヅカラ、お念仏のお徳で「真如の門に転入する」ことになる。すなわち、オマコトの心の内に入らせていただくのであります。これは自力の離れがたいことを知らしめるものも念仏であるが、それと知って、オノヅカラ自力の心を離れしめるものも念仏であるということでありましょう。それは「おしえざれども」とありますが、また教えることも出来ぬものであります。』

とありますが、この通りだと思いません。自分から、どうしよう、こうしようとしなくて

もお念仏そのものの徳として、定散自力の念仏であろう

が、ナンデアロウが、ともかくも、お念仏申し申しお聴聞（読書も同じ）しておれば、

本願念仏のオイワレをお聴かせいただいておれば、お念仏

そのもののお徳で、ああ、自分というものはナントイウ、

ハカライの止まぬものか、疑いの止まぬものか、自分とい

うものは、なんという、逆謗センダイ、無仏法、無信の者

であるかということをおいおいとオノヅカラ知らしめら

れて、お念仏にこもっている願力の自然、果遂のお誓いに

よって、「おしえざれども自然に」オノヅカラ、「真如の

門に転入する」ということになつてしまうので、それは「

教えられて、どうこう」ということでなくて、法の徳、お

念仏の徳としてオノヅカラ、そうなるのであります

から、自分から「どうなる、こうなる」と「どうしよう、

こうしよう」としないで、ただお与えのお念仏をいただき

つつ、自力・他力ということもさしておいて、本願念仏のオ

イワレを、御本意を、聞き聞きすることが、ナニヨリも大切とすることです。

そうすると、今回の手紙にもあるように

「念仏往生の本願の思召しの深さに次第にひきこまれて

います。」

というようになってくるので、それはそのバックに、如

来の（念仏往生の本願）力、果遂の願力があつての、オハ

カライであると、いただくホカありません。

「邪見、謗法、闡提、無信の我れにという、親鸞聖人の

有難さ、深さ、ようやく少しづつ知れてまいりました。」

というように、願力の自然として、オノヅカラそうなる

て下さるのであります。ただ念仏しつつ、聞くこと、

聞くこと、それがナニヨリ大切と、聞くことあります。

○ 「信ずる力も疑い晴らす力もないと知らせていただく

のみ可能で、我が力では、そうと知る力もないとの仰せ。

念仏の仰せが、そのまま、我が心を照らし出して下さるの

であらうと思いません。」

とありますが、まったく、その通りでして、われわれの力では、信ずることも、疑い晴らすことも出来ないのであり

ます。また、久遠劫来の「悪衆生、邪見、無信の」我れ我れには、

それを、それと知る力もないのであります。それで、久遠

劫来、煩惱、妄念のゆえに、いたずらに「苦惱」し来たり、

本願念仏のオイワレを聞いても、「疑いの心」がおこつて、

止まないであります。またそれゆえに「苦惱」してやま

ないのであります。それ故に、如来法蔵様、十劫の昔にす

でにそのようなワレワレ衆生の、本性、自性を、見抜き

つての上で、五劫思惟・永劫御修行のアゲクに、念仏を成

就し、「念仏往生の本願」をお建て下されたことゆえ、ど

れだけさからつても、うたがつても、結局は、

『ただタノムベキは弥陀如来』果して生死出離出来るかどう

かは、凡愚のワレワレとして、わかるうハズはないが、「た

だタノムベキは、弥陀如来、念仏往生のご本願よりホカナ

イ、ただ（唯）念仏のホカなし」というように、なつて来、

す。それは「法」の「法力」の自然としてで、我ら凡愚のハ

カライによつてでは無く――

○ 「信ずる力も疑い晴らす力もないと知らせていただく

とも、念仏の光りによつてのみ、可能で、我が力では、そ

うと知る力もないとの仰せ、念仏の仰せがそのまま、我が

心を照らし出して下さるのであらうと思いません。」

とあります。お念仏の光りが照らし出して下され、お念

仏の光りによらなければ、ワレワレ凡夫には、自分自身を

悪衆生、邪見、無信の者――と知る力もないし、

「かかる者のために、如来、よろづの善の中から、名号を

えらびとりて、お与え下さ

れている。」

といったことも、ワレワレには、わかりようがないのであ

ります。それで『正信偈』に聖人が源信和尚のお言葉から

極重悪人唯称仏 我亦在彼摄取中 煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我 と、ワレワレ凡愚は 煩惱にマナコ障えられて 摂取の光明見ざれども

（摂取の光明は、如来大悲・摂取の信心といつてよく）

大悲ものうきことなくて 常に我が身を照らすなり

で、大悲の如来は、如来の大悲は、摂取のお光明、智慧の

お光明として、「常に我が身を照らすなり」と照らしづめ

に照らし下されて、愚痴なワレワレに、おいおいと我が機

我が心の「悪衆生、邪見、無信の者」であるということ、

「逆謗、センダイ、無仏法」であることを、照らし出して、

オイオイと思ひ知らせて下さるのであります。そうして、

念仏はまことに浄土に生まるるタネか、地獄に墮ちる業

かは、ワカラヌままに地獄なりとも、極楽なりとも、それ

は

「汝の出離生死については一切、この弥陀が引き受けて、

シマツをつけてやるぞよ」とある如来の願心、それをい

ただいての「よき人」の仰せのままに、

ただ（唯）念仏申せ の仰せのままに、念仏申すよ

りホカに、お念仏いただくよ

正信偈に学ぶ同答

(五十五)

源信広開一代教
偏帰安養勸一切
専雑執心判浅深
報化二土正弁立

(書き下し) 源信、広く一代の教を開きて、ひとえに安養に帰して、一切を勧む。専雑の執心、浅深を判じて、報化二土、正しく弁立せり。
(現代語訳) 源信僧都は、釈尊の説かれた教を広く学ばれて、ひとえに浄土を願ひ、また世のすべての人々にもお勧めになった。さまざまな行をまじえて修める自力の信心は浅く、化土にしか往生できないが、念仏一つをもつぱら修める他力の信心は深く、報土に往生できると明らかに示された。

*

D 「ここからは宗祖親鸞聖人が源信僧都の仰せを通して真宗のお心をお示しになった段です」

N 「源信僧都とはどんな方ですか」

D 「略歴を申し上げますと、源信僧都は真宗の七高僧のお一人で、九四二年大和の国(現在の奈良県)の当麻にお生まれになり、若くして出家し、天台宗の根本道場である比叡山に登り、良源上人に師事して天台宗を学びました。四十四才の時『往生要集』を著し、広範な仏教文献を

引用して、穢土であるこの世を厭い阿弥陀仏の浄土に生まれる道を自らも歩み、他の人々に広

くお勧めになりました。七〇部あまりの著作がある一代の碩学です。七十六歳で往生されました」

N 「源信、広く一代の教を開いて、ひとえに安養に帰して、一切を勧む」の二句ですが、まず「広く一代の教を開いて」とは」

D 「一代の教とはお釈迦様が一代に説かれた全ての教え(一切経)のことで、源信僧都は生涯に五回も一切経を読んだほどの大学者でした。それは学者となつて名声を得るためではなく、ご自身のみならず一切の衆生が迷いの境界から覚りの境界に至る道を探ねての学びでした」

N 「それほど広く仏法のまことを求めて学ばれたのですね」

D 「ええ、それは僧都の書かれた書物を読むと、さまざまな経典や論書が広く引用されている点からも伺えます」

N 「では「ひとえに安養に帰して、一切を勧む」とは」

D 「ご自分も他の衆生も、迷いを離れる道は、今の世においては、お念仏をいただいて一筋に安養(安楽浄土)に帰入する、いわば生まれ変わる道である、とお勧め下さるの」

N 「安養というのはお浄土のことなのですね」

D 「ええ、お浄土のことを安養ともいわれるのは、浄土の領域に生まれると極

めて安らかであり、法(真理)の恵みを受けて、豊かに養われることのできる境界といわれるからでしょう。あるいは「広く一代の教を開きて、ひとえに安養に帰して、一切を勧む」を次の様にも読めるでしょう」

N 「どう読めますか」

D 「釈尊の説かれたあらゆる教えは、すべて念仏のお心を広く説かれたものであつて、一切衆生を、お念仏をいただいて安養浄土に帰らしめるためのお骨折りである、とも読めましょう」

N 「この一節は私たちにどういう事を教えて下さっているのでしょうか」

D 「源信僧都は平安時代の半ばに、穢土なるこの世界を厭い、念仏をいだけて安らかな極楽浄土に生まれ、浄土に生まれて迷いの衆生を救う働きをさせていだけたくといく道を広範な仏教の教えを学ばれた中からお示しになり、自らも浄土への往生を願つて念仏の道に生きる生涯を送られました。この源信僧都の教えはその後「地獄と極楽」の教えとして日本人に定着することになり、また念仏が民衆に広く弘まる基を作られました。いわば日本人に往生極楽の道を最初に敷かれた高僧です」

N 「もし源信僧都が先達としておられなかつたら、法然聖人も親鸞聖人も出られ

れなかつたと言っているのでしょうかね」

D 「ええそう思います。私たちもその流れに中にいて、今念仏の教えにあうことができたのですから源信僧都の御恩は大きいのです」

N 「ただ現代に、穢土を厭い、極楽浄土を願うという人は少ないですね」

D 「ええ。それはたしかです。しかし、自らの悪業煩惱を嘆き、悪が多く苦しみの多いこの世の姿を悲しみ、安らかで浄らかな領域に至ることを望み、苦しみ悩む人々の助けになりたいという願いは人間のいのちの底にあります」

N 「確かにそういう願いは時代を超え地域を超えた普遍的な人間の願いだと思います」

D 「ただ私たち現代人は、世の中の風潮に流され、さまざまな娯楽・享楽や忙しさなどで、自分の中に潜んでいるこのような深い願いを自覚できないのですね。しかし、こうした願いはいつも私たちのいのちの底に流れている願いですから縁あつてそれに気づき、お念仏を申すようになるのではないのでしょうか。今度の東北の震災でもきっとこういういのちの底の願いに気づいて新しく生きはじめの人が出て下さると思います」

(了)

《《秋季彼岸会》》

九月二十二日(日)

午後二時始まり